

二〇一七年度  
聖園女学院中学校 入学試験問題

国語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで中を開いてはいけません。
- 二、受験番号・氏名を解答用紙の定められた欄にかならず記入しなさい。
- 三、試験問題の印刷がはつきりしない場合には手をあげなさい。
- 四、解答は解答用紙に記入し解答用紙のみ提出しなさい。

二次

- 一、次の——線部をひらがなに直しなさい。
- (1) ていねいに細工をする。
  - (2) 渡航の手続きをする。
  - (3) 思い出が脳裏をよぎる。
  - (4) 五月雨が降る。
  - (5) 難問に挑む。

二、次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) かんせん症を予防する。
- (2) 好きなことにぼつとうする。
- (3) 品質をほしょうする。
- (4) のうさんぶつを売る。
- (5) 画用紙に色をぬる。

三、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

社会の動きや時代の流れをつかむのに、専門的な深い知識はいりません。ごく一般的な、誰でも手に入る情報を素材として、自分なりの判断をしていけばいい。そのためにいちばん役に立つのが新聞なのです。

他の人が知らない限定的な情報を手に入れようとするよりも、新聞や雑誌に載<sup>の</sup>っているような、あらゆる人に公開されている情報を総合し、取捨選択して、社会のすがたを把握する能力を養うことがずっと大切です。そのほうが間違いがありません。

皆さんの友達づき合いの中でも、「ここだけの話だけど、特別に教えてやるよ」などと言って、誰かの噂話をする人がきつといることでしょう。でも、そういう情報というのは、まず信用できません。そういう話は無視するか、または「本当なのかな？」と気になった場合は、直接、その当事者に尋ねればいいのです。本人に聞くのがいちばんいい方法です。

夏目漱石の『彼岸過迄』という小説の中に、こんな話が出てきます。

探偵趣味をもった青年がいて、学校を卒業してどこかに就職したいというので、会社を経営している友達のおじさんに頼みます。そうするとそのおじさんが、彼に一風変わった入社試験をやるんです。ある都電の駅から紳士が降りてきて、若い女の子と会ってどこかへ出かけるはずだから、その二人が何者で、どういう関係で、どこへ行つて何をするのかを調べろという。青年が探偵趣味があるというので、面白がつてそんな問題を出したんですね。

青年が指定された時間に駅へ行くと、本当に紳士が降りてきて、女の子と連れ立って歩いていく。青年はその後をこっそりついていきます。二人がレストランに入ったので近くの席に陣取<sup>じん</sup>って会話を耳を傾け、そこを出た後もずっとつけていく。そのうち二人は別れたので、紳士のほうについていくんですが、夜になってしまいい、尾行をあきらめます。

青年は結局、友だちのおじさんの経営者に、何もわからなかったと報告せざるを得ないんですが、しゃくに障<sup>さわ</sup>ったこともあって、「こういう場合は失礼でも本人に、あなたはどんな人で、連れの女性は誰で、これからどこへ行くのかと直接尋ねるのがいいんじゃないか」という意味のことを言います。するとおじさんは、その通りだ、そういうことに気がついたのは大したものだと言って、青年を採用するんです。

ぼくはこれを読んで、漱石という人はとてもよくもののわかっただと改めて思いました。この青年やおじさんの言う通りで、あることについて知りたかったら、跡<sup>あと</sup>をつけたり、まわりの人に聞いて回<sup>まわ</sup>ったりせず、本人に直接聞くのがいちばんいいんです。

( A )

それができない場合は、誰もが手に入る情報をもとに判断をする。そのときに、もっとも役に立つのが新聞です。

新聞に載っているのは、一般に公開され、共有されている情報です。その、みんなが知っている情報をもと

にして、世の中に対して自分なりの判断をすればそれでいい。もし判断が間違っていたら、そのたびに訂正しながら、おおよその時代の流れをつかんでいけばいいのです。

( B )

じゃあ、新聞なんか読まなくても、テレビを見ればいいじゃないか。そのほうが楽だし早いじゃないか。そんなふうに見える人もいるかもしれませんが。でもやはり、ぼくは新聞を読んでほしいと思います。新聞には、テレビにない良さがあると思うからです。

テレビというのは、映像と音が組み合わさっています。見る側は、目とか耳とかの感覚を働かせることになります。テレビの前に座っていると、感覚に訴える要素が次々にあらわれ、次々に消え、移っていくわけです。これはテレビの特色ですが、同時に欠陥けっかんでもあります。

ときどきこちらが考えさせられるようなことを言ったり、興味深い画像が出てきたりしますが、あつと思ったらもう次に移ってしまい、よほど印象深いもの以外は思い出しません。

( C )

それに対して新聞、つまり活字の場合は、立ち止まって考えることができます。それだけではなく、さらにその先へ考えを進めることができる。想像を広げたり、新しい着想を得たりということが可能なのです。

映像から得る感覚的な刺激は、その場だけで終わってしまうことが多いのですが、活字の場合は、新しい何かを付け加えたり、まったく違うものを創り出したということがしやすいのです。

テレビを見ていると、社会問題や事件などを解説するのに、その道の専門家が出てきます。そういうとき、ぼくは「この人は専門家なのにあまり本当のことを言わない」「もっと突っ込んで言ってくればいいのに、どこか遠慮えんりょしているな」と思うことがあります。

それは、一種の社会的な社交のようなものなのでしょう。テレビは大勢の人が見ていて影響が大きいので、正直に洗いざらいものを言うのと差し障りがあるという考え方です。本当のことを言うとすぐに止められたりするるので、専門家といえども大したことを言わない場合が多いのです。

テレビほどではないかもしれませんが、新聞でもそういうことはあります。だから、テレビや新聞で専門家が言っていることを、全部鵜呑みうのみにする必要はない。それまで、たくさん情報に接してものを考えてきたあなたという人間が、自分なりの判断をして、それが専門家の言っていることよりも正しいと思ったなら、その判断のほうを信用すればいいのです。

( D )

時間が経たつても「ああ、やはり自分が正しかったな」と思うこともあるでしょうし、「あのことに関しては自分は間違っていたな」とわかることもあるでしょう。

それはそれでかまわないのです。

ここまでお話ししてきたように、大事なものは、そのときそのときで、自分の判断<sup>⑧</sup>というものをもっていることなのです。

(吉本隆明『13歳は二度あるか——「現在を生きる自分」を考える』より。一部改変)

- (問一) — 線①「あらゆる人に……能力を養う」とありますが、それは何のためにするのですか。「ため。」に続くように、文中から十五字で探し、書き抜きなさい。
- (問二) — 線②「こんな話」の内容が書かれている部分を文中から探し、始めと終わりの六字を書き抜きなさい。
- (問三) — 線③「一風変わった入社試験」とありますが、試験を受けた結果、青年が気づいたことはどのようなことですか。答えなさい。
- (問四) — 線④「歩いていく」の主語を文中から探し、書き抜きなさい。
- (問五) — 線⑤「しやくに障った」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。  
(ア) 腹が立った (イ) 失敗した (ウ) 不安になった (エ) 思いついた
- (問六) — 線⑥「本人」と同じ意味で使われている言葉をここより前の文中から三字で探し、書き抜きなさい。
- (問七) — 線⑦「新聞には、テレビにない良さがある」とありますが、それはどのような良さですか。説明しなさい。
- (問八) — 線⑧「自分の判断」とありますが、「自分の判断」をするうえで大切なこととして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。  
(ア) さまざまな社会問題について、その道の専門家が言っていることを正しいと思って取り入れること。  
(イ) 正しい情報が書かれている新聞を読んで多くの知識を学び、それをそのまま自分の意見とすること。  
(ウ) テレビを見たり専門家の話を聞いたりしないで、色々なことを自分の経験にもとづいて決めること。  
(エ) 一般に公開され共有されている多くの情報を素材にして、どのようなことも自分の頭で考えること。
- (問九) この問題には次の一文が抜けています。この一文が当てはまる部分を文中の ( A ) ( B ) ( C ) ( D ) の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ニュースは、新聞だけではなくテレビで知ることができます。

四、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

杉木立を両側に見ながら、山道を上へ上へと登っていく。冬でも葉の落ちない杉山は、朝の九時だというのにほの暗く、湿って冷たい空気が満ちていた。吐く息は、<sup>①</sup>ほわりと白い形に変わり、枯葉を踏みしめる音も、鳥のさえずりも、山の中にしみ込むように消えていく。不思議なほどに静かだ。

風で吹き折れた杉の枯れ枝が足にからまって、喜樹は何度かつんのめりそうになった。

「昔は、山道もからつとして、枯れ枝ひとつ落ちていないもんだった」

庄蔵は、枯れ枝をナタの先で払いながら進んだ。

「煮炊きも風呂もみんな薪だったから、里のもんがきれいに拾って行ったのさ」

庄蔵が、<sup>②</sup>だれに向かってでもなく、小さくつぶやいた。

「年々、山も荒れていくなあ……。わし一人の<sup>③</sup>Aには余るわ……」

返事を返すものはない。みんな、だまって歩いていく。庄蔵のつぶやきは、そのまま山の木々の間に吸いこまれていった。

二十分も登ったところで、庄蔵が手をあげ、前方を指差した。

百年杉が、ずんとそびえていた。

空を指すことだけを考えて生きてきたかのように、太い幹がまっすぐに伸びている。

喜樹は、木肌に触ってみた。かさぶたのような茶色い木の皮は、思いのほかしっとりとしている。<sup>④</sup>内側から手の平をぐつと押し返されるような感触に、喜樹はハツとした。

（百年杉……。こいつは、確かに生きている！）

「喜樹、そっち側から手をよこしてみて」

楓が杉に抱きつくように両腕を回した。喜樹も反対側から杉を抱くように手を伸ばした。

楓と手を結ぼうとした喜樹は、姉の指先をみて、え？ と眼をしばたかせた。

いつも念入りにとがらせていた爪先が、きれいに切りそろえられている。そういえば、毎日時間をかけていた巻髪にも、このところお目にかかっている。

「ほら、はやく！」

楓の声にせっつかれ、喜樹も手を伸ばした。

（うわあ、すげえ太い。そのうえ、ごつごつしてすげえかたい！）

喜樹は、（おれが百年以上を生き抜いた証しを覚えておけ）と、杉の太木から自分の両腕と腹全体に、<sup>⑤</sup>刻印さ

れているような気がした。

庄蔵が、せいやんとつんつあんと並んで、百年杉の幹の周りに立った。そのまま、木に向かってすつと手を<sup>⑥</sup>合わせた。

楓が喜樹の横腹を突き、「手を合わせろ」と唇を動かした。

喜樹は、自分まで神妙な姿をすることが、気恥ずかしかった。けれども、その場に漂う神聖な気配に押され、

楓にならってそつと手を合わせた。

目を開くと、せいやんが、閉じた唇にぎゅつと力を込め、腕組みをして杉を見上げているのが見えた。

楓は、気持ちが高揚したように、上ずった声で喜樹にささやいた。

「見て、ぞくぞくするよ。さすが木こり職人だね。どうやって木を伐るか、イメージしてるんだよ」

喜樹は、思わず息をのんだ。ひとり、静かに考え込むせいやんは、<sup>⑦</sup>いつもよりもひとまわり体が大きく見えた。百年杉を伐り倒すという仕事の大きさが、喜樹にも伝わってくる。

つんつあんと庄蔵が、杉の枝先や、周りの木の木の間隔を指差し確認しながら、真剣な表情で相談を始めた。

楓が声を弾ませた。

「あれさ、木を倒す方向と、避難する場所を決めているのよ」

「そうなの？」

「斜め下横向きに倒すのが安全なの。倒す方向に、じゃまになる木がないか、上の方で他の木と枝やつるが絡ま<sup>から</sup>っていないかのチェックもするし、風向きだって大事なんだから」

「へえ、そうなのか」

楓に丁寧<sup>ていねい</sup>に教えられ、喜樹も、好奇心がそそられてきた。

「んだば、こつあござつて」

つんつあんは、杉の木から三メートルほど離れた場所に喜樹たちを案内してくれた。

楓が、あたりをぐるりと見回しながら、喜樹に言った。

「ここは、待避所だよ。木が倒れるのと反対側に避難するんだ。普通の場合よりちょっと遠いのは、あたしたち子どもがいるせいだね」

楓は、少しでも現場の作業を見ようと、背伸びをする。喜樹もつられて、背伸びをした。

「ほら、これから、受け口作りがはじまるよ」

「受け口って何？」

楓は、まるで自分がチェーンソーを扱っているような動作をしながら、喜樹に教えてくれた。

「まず木を倒す方向に、三角に切れ目をいれるの。それから、反対側にも追い口という切れ目を入れて倒すのよ」

<sup>⑦</sup>喜樹は面食<sup>めんく</sup>らつた。ファッション雑誌ばかり読み漁<sup>あき</sup>っているはずの楓の口から、山の知識がよどみなく流れてくる。

「姉ちゃん、なんでそんなに、色々知ってたんだ？」

「図書館の本を読んできたの。何にもわからないままそこにいたって、見えるものも見えないじゃん。下調べしといたってわけ」

「へえ、さすが優等生様はちがうね」

喜樹は、何も知らずにただついて来ただけの自分が、少しだけ恥ずかしくなった。勉強では姉にかなわないくやしさも手伝<sup>⑨</sup>って、つい嫌味が口からもれた。

「でもさ、<sup>⑩</sup>あたしのは本の中の知識にすぎないんだよね。せいやんたち職人の経験<sup>かん</sup>と勘には、ぜんぜんかなわない」

楓は、独り言のように言うと、くやしそうにきゅっと唇を閉じた。

(堀米薫『林業少年』より。一部改変)

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

(問一) — 線①「ほわりと」と異なる用法のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 急にボールが飛んできたので、さっとよけた。

(イ) 見つからないように、じっとおとなしくしていた。

(ウ) あわててぶつかってしまい、いすががたと倒れた。

(エ) 大きな地震が起こって、家がぐらりと傾いた。

(問二) — 線② 「だれに……つぶやいた」とありますが、この時の庄蔵の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 枯れ枝が山道に落ち、荒れていく山の状況をさびしく思う気持ち。

(イ) 喜樹が転びかけたので、周りの人にも注意をうながそうとする気持ち。

(ウ) 里の人々が薪を取りに山へ入らなくなったことに腹を立てる気持ち。

(エ) 煮炊きや風呂を薪でおこなっていた頃のよさを伝えたいという気持ち。

(問三) — 線③ 「Aには余る」は「自分の能力を超えている」という意味です。Aに当てはまる身体の一部を表す言葉を文中から漢字一字で探し、書き抜きなさい。

(問四) — 線④ 「内側から……ハツとした」と同じような内容を表している一文をここより後の文中から探し、始めと終わりの六字を書き抜きなさい。

(問五) — 線⑤ 「ずっと手を合わせた」とありますが、この時の庄蔵は手を合わせながら何をしていたのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) あまりにも大きな杉の木を前に考えこんでいた。

(イ) 長い時を経てきた杉の木に対し敬意を表していた。

(ウ) 杉の木を伐り倒すイメージをふくらませていた。

(エ) 杉の木を伐る時の高揚感を抑えようとしていた。

(問六) — 線⑥ 「いつもより……見えた」とありますが、なぜですか。説明しなさい。

(問七) — 線⑦ 「喜樹は面食らった」とありますが、この時の喜樹の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 楓が山の知識をくわしく説明したことで、何も知らない自分が見下されたように思い、怒りを感じた。

(イ) 喜樹には楓ほど山の知識がなかったので、全く話についていくことができなくて情けなくなった。

(ウ) ファッションにしか興味がないように見えていた楓が、山の知識をたくさん持っていたことに驚いた。

(エ) 木の倒し方やその他の山の知識を堂々と話す楓に対してさすが姉であると感じ、ほこらしく思った。

(問八) — 線⑧ 「よどみなく」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 止まることなくすらすらと (イ) 次から次へとたくさん

(ウ) 追い立てるように早口で (エ) わかりやすく丁寧

(問九) — 線⑨ 「つい」を用いて、主語・述語のとのつた短文を作りなさい。

(問十) — 線⑩ 「あたしのは……かなわない」とありますが、この内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 楓は頭の中の知識だけで理解しているけれど、職人たちが実際に木を伐ってきた今までの積み重ねには勝てないということ。

(イ) 楓は自分一人で本から学んだけれど、職人たちが皆で協力して木を伐ってきたことのきずなの強さには勝てないということ。

(ウ) 楓は好奇心から木の伐採に興味を持って調べたけれど、職人たちは仕事で真剣に取り組んでいるのでその真剣さには勝てないということ。

(エ) 楓は喜樹に教えるために勉強したけれど、職人たちは喜樹に見てもらったために伐採しているのでその迫力には勝てないということ。

問題は、ここで終わりです。